慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール賞と作家の栄光 : マルセル・プルーストと『NRF』誌の関係をめぐって
Sub Title	Le prix Goncourt et la gloire de l'écrivain : autour de la relation entre Marcel Proust et la N.R.F
Author	大嶌, 健太郎(Oshima, Kentaro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.120, (2021. 6) ,p.148 (93)- 165 (76)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01200001-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール賞と作家の栄光
―マルセル・プルーストと『NRF』誌の関係をめぐって―

大嶌健太郎

1919年は、マルセル・プルーストが、『失われた時を求めて』第2巻、『花咲く乙女たちのかげに』をもってゴンクール賞を受賞した年である。文学賞は、一般的に、受賞作品の内的価値や作者の創造行為とは独立したかたちで、ひとつの社会的事件を構成する。そのことは、わが国の芥川賞や世界的知名度を誇るノーベル文学賞だけでなく、フランスのゴンクール賞についても言える。したがって、文学賞について語る場合、個々の作品の外部にあるさまざまな社会的・文化的要素に関心を向けざるをえない。シルヴィ・デュカスは、文学賞という制度が定着したことによる文学者の地位や文学市場の原理、文学場の機能の変質について分析し[1]、ナタリー・エニックは、ミシェル・トゥルニエやクロード・シモン、アニー・エルノーなど、文学賞受賞経験のある文学者たちへの取材をもとに、受賞作家の自己イメージと、読者公衆が受賞作家に対して抱くイメージとの乖離を明らかにし、現代における文学者のアイデンティティー形成の在り方を問い直した[2]。プルースト研究の分野では2019年、ティエリ・ラジェが、プルーストのゴンクール賞受賞をめぐる当時の文壇における論争を総合的にまとめている[3]。本稿では、以上のような研究への貢献となるべく、プルーストと『NRF』誌との関係を例にとり、作家や文学場、書籍市場に対して文学賞が持つ影響力について検討していきたい。『NRF』誌、およびNRF出版は、プルーストが『失われた時を求めて』の創作に取り掛かってから死に至るまで一貫して関係をもちつづけた集団である。当時の文学場、文学市場におけるプルーストの地位は、この集団との関係のなかで形成されたのであり、デュカスやエニックの明らかにした文学賞の機能がプルーストの作家人生に影響を与えたとすれば、必然的に、彼とNRFグ

ループとの関係も大きく揺るがされたはずである。このような視点のもと、まずは1919年以前のプルーストとNRFグループとの関係を整理した後、1919年のゴンクール賞受賞によってプルーストのとった文学戦略がどのように変化していったのか、論じていきたい。

1. 前史―1919年以前のプルーストと『NRF』誌

プルーストと『NRF』誌との関係は、出だしからすでに険悪なものであった。1913年、『失われた時を求めて』第1巻の出版を『NRF』誌が拒絶したためで、プルーストが雑誌に対して不満を抱くのは当然であった。アンドレ・ジッド、ジャック・コポー、ジャン・シュランベルジェ、マルセル・ドルワンなど、『NRF』誌の中心的メンバーから成る査読委員会が、プルーストの小説に好意を抱けるはずがなかった理由は主に次の２点である。第一に、小説の多くの部分が上流階級の風俗描写にあてられており、『楽しみと日々』によってしか知られていなかった新人作家プルーストの、スノッブな作家としてのイメージがかえって強まってしまったこと。次に、査読委員会が、プルーストの原稿を注意深く読んですらいなかったという事実がある。周知のように、プルーストの原稿の筆跡はひどく乱雑で、解読不能な文字が散乱している。その上、削除された部分や加筆修正も膨大であるし、そもそも作品自体が長大であることから、査読には困難を要したのである[4]。

1912年の末、ジャック・コポーは、小説はおろか、わずかな抜粋でさえ出版を許可するのは不可能である旨を通達した。その後しばらくプルーストは、『NRF』誌に抜粋だけでも掲載できないかと希望を持ちつづけていたが、結局、1913年2月、コポーは、いかなる文章も発表させることはできないと最終判断を下してしまった。『NRF』誌から拒絶されたプルーストは、出版を急がなければならない焦燥感もあいまって、雑誌を辛辣に批判する。たとえば、「その精神状態が、芸術的な着想と構築からはまったく対極にある[5]」というシャルル・ペギーの文章をNRFが賞賛しているのを見たときの「落胆ぶりは、伝えても伝えきれない[6]」と述べている。そして彼は、自分の小説が拒否された理由は、ページ数を確保できないという技術的な問題ではなく、編集部幹部の文学への無理解にあり、自身の小説美学とNRFの方針には越えがたい径庭があると考えるにいた

る[7]。以下は、コポーへ宛てた書簡である。「1年以上前にNRFの件でビベスコに宛てた最初の手紙で、私は、あなたがたと全面的に分かり合うにはほど遠いと申しました。精神の相違だけでなく、肉体の相違、個人の人格が思想よりも深く表現される文学的趣味の相違によってそう申すのです[8]。」また、自身の作品が掲載拒否の憂き目を見たことについては、「編集部の連中は、現代の定期刊行物や演劇が、真摯な努力を奨励していないと言って激しく非難しているくせに、いざ自分たちにそうする機会がめぐって来ると、執拗に懇願されているにもかかわらず、その機会を棒に振ってしまうのだ[9]」と述べる。このように、1913年の段階では、『NRF』誌に対するプルーストの評価は、信頼よりも不信感が勝っていた。

しかし、結局グラッセ社から出版された小説第1巻についてのアンリ・ゲオンによる批評文が1914年の1月に発表されると、『NRF』誌とプルーストの関係修復の機会がめぐってくる。ガストン・ガリマールは、プルーストに対して、『ル・フィガロ』紙ですでに掲載されていた過去の文章を選文集形式で出版しなおす計画を持ちだし、さらには、もしグラッセ社を離れることが可能なら、小説の続編の出版を喜んで引き受けたいと申し出る[10]。ジャック・リヴィエールは、『失われた時を求めて』は「教条的構築物[11]」であると評価し、プルーストを満足させた。その後もリヴィエールは、プルーストを評価するための論文を『NRF』誌に発表する。アンドレ・ジッドは、1月10日、「この本を拒否してしまったことは、NRFの最大の過ちであり、私の人生でもっとも胸の痛む後悔と良心の呵責の原因のひとつです[12]」と、プルーストに告白している。3月末にジッドからNRF出版で続編を出すよう勧められた際には、プルーストは、グラッセに対する忠誠心を守りつつも、NRFから出版することは自身が「もっとも熱望していた名誉[13]」であると語る。この頃すでに出版社の変更を検討していたらしい作家は、実際に、ジッドとのこのやり取りから数日後、グラッセに対して、NRF出版に移籍する意志があることをほのめかしている[14]。グラッセからNRF出版への移籍をめぐる経緯を振り返ることは、そのほとんどが周知の事実であることを鑑み、本稿では割愛する。ここではただ、NRF出版からの出版の可能性が見えだしたとたん、正式の移籍と契約の締結がいまだ実現していないにもかかわらず、作家が、NRFの読者層獲得のために動きだしていたという事実を確認しておきたい。

1914年以降、プルーストは、『NRF』誌への投稿を断続的に行いはじめる。リヴィエールの要請に応じ、同年6月号と7月号に掲載するための抜粋作成を4月末

には開始していたようである。リヴィエール宛の書簡では、「私が、自分の作品の断片を発表したいと望む唯一の出版物こそ、NRF誌です[15]」と述べた後、かつて『ル・フィガロ』紙に対して行っていたように、作品のなかでもとくに詩的描写にあてられた個所を抜粋で発表することを提案した。つまり、『花咲く乙女たちのかげに』の第2章「土地の名：土地」に含まれた、バルベック海岸の描写のことである。この断章の選択は、『NRF』誌購読者に、第1巻にはなかった『失われた時を求めて』の新しい要素を提供するためのものであったようだ。

> 第2巻の最後の3分の1から抜粋を選択いたしました。事実それは、あなたがご存知の巻とはまったく異なったものです。第2巻のはじまりは、まだ、スワンやジルベルト、ベルゴットについてですが、あなたがたの読者たちは、この抜粋のなかに少しは新しさを見出すことになろうかと存じます[16]。

7月号については、ゲルマント公爵夫人と「祖母」の死についての断章を提供する予定であった。このようにして作家は、次巻の出版に先駆けて、『NRF』購読者がその主要部分について事前に把握しておけるように準備していたのである。

5月15日にリヴィエールに宛てた書簡では、以上2回の抜粋が、きたる第2巻の出版に先立ち、最大限の宣伝効果を発揮するための措置を提案している。

> 思いますに、原稿冒頭の2行を割いて、これは近く上梓される「失われた時を求めて」第2巻からの抜粋であることを示したほうがよろしいでしょう。この総題はすでに第1巻にあてられていますので、NRFからの注意書きがないと、これが未発表の作品のものであることがおそらく理解できない読者もいるかもしれません。同様に、2つ目の抜粋を7月号にお渡しする予定ですので、最後に「つづく」、あるいは、「次号にて完結」と記しておいたほうがよいでしょう[17]。

『NRF』誌の顧客にとっての自身の知名度の低さを意識しているのか、まずは作品のタイトルを周知させることによって、『NRF』誌周辺における自身の名声を高めるための地場を形成したい様子がうかがえる。抜粋発表に期待される宣伝効果とは、つづきを、あるいは作品全体を本で読みたいという好奇心を事前に読者

に芽生えさせておくことである。また、未来の読者を、作品の主要素にあらかじめ慣れ親しませておくことも重要だ。これらの戦略は、プルーストが『ル・フィガロ』紙への抜粋掲載を行うことですでに学習していたことである。6月号と7月号の連続性を読者に強調しておくことの必要性を説いているのも、『NRF』誌が抱える購読者の関心を持続させておきたいという意志の表れであろう。

これらの抜粋発表やNRF幹部らによる書評のおかげもあってか、1916年には、NRF周辺の文壇、およびその読者層のあいだでの知名度は十分に高まったと、プルーストは確信を持ったようである[18]。同年5月末のガリマールへの書簡では、NRFの読者層こそ、すなわち自身の読者層であること、この読者層のレヴェルの高さが、NRF出版での出版を望んだ理由であることを明らかにしつつ、ジッドやフランシス・ジャムなど、自身が尊敬するNRF中枢の作家らによる高評価を得られたことについて満足を表明している。もちろんこの時点で、NRF出版への移籍はまだ正式決定してはいない。だが、NRFグループの一員になったとは言えないまでも、この集団を基礎とすることで自身の文学的列聖が行われることを、作家はすでに予感していたのである。

2. ゴンクール賞受賞と読者公衆による承認

1919年の『花咲く乙女たちのかげに』のゴンクール賞受賞は、近代の文学場において文学賞の果たす役割を象徴的に例証している。文学賞とは、文壇の支配的人物によって構成される審査団が、年間でもっとも優れた作品を聖別するものである。受賞作品は、真の芸術的価値を獲得し、受賞者は、その他諸々の作家との差別化によって、経済法則の支配する出版業界にあって抜きんでた存在となる。文学賞受賞はまた、そのような象徴的価値を付与するのみならず、作品の売り上げを上昇させ、実質的な利益をもたらす。これらの効果を発揮する文学賞は、文壇のみならず、新聞の文化面・文芸欄を賑わせ大衆の関心を引きつけるため、ひとつの社会的・文化的事件たりえるのである。

1919年のゴンクール賞は、ベルナール・グラッセの言うように、読者公衆にとってひとつの重要な文化的出来事であった[19]。プルーストは、文学的列聖と商業的成功という二重の恩恵にあずかる。NRF出版から出版された、いわゆる純文学作品のなかで最初に商業的成功を収めた作品が『失われた時を求めて』第2

巻であったという事実は、ゴンクール賞の影響力の大きさを物語っている[20]。ところで一般的に言って、ゴンクール賞のような文学賞は、普段は難解な作品を手にする習慣のない読者公衆にまで作品を流通させるきっかけをつくることができる。ヴァレリー・ラルボーの提案した図式にしたがえば、世紀転換期における潜在的な文学消費者は、以下の４つのカテゴリーに分類される。第1のカテゴリーは、いわゆる純文学作品を好む文学愛好者、および文人たち自身から成る文化的エリート層。第2は、必ずしも純文学作品を好んではいないし、文化的素養も不確かな社会的支配層。第3は、「出版社の案内にしたがって読む本を選択し、日用品感覚で平易な書籍を消費する[21]」読者公衆。そして第4のカテゴリーは、「新聞以外は何も読まず、年間で2、3冊以上の本を読むことはない大多数の公衆[22]」である。文学賞を受賞した作品が接触することのできるのは、中間を占める２つのカテゴリーに属する読者公衆、つまり、文学場の埒外にあり、文学教養を必ずしも備えていない読者と、読書習慣はあるものの消費物としてしか本に興味を示さない読者である。シルヴィ・デュカスは、この事実をふまえて、受賞作品はそれを上梓した出版社と著者に経済的利益をもたらすものの、それだけにかえって、正統性のある聖別と永続的な評価を作品に約束するものでは決してない、と指摘する[23]。というのも、受賞という事実に興味を抱き作品を買い求める読者はおもに、文学場の価値体系や内的法則とは無縁のカテゴリーに属する読者だからだ。したがって、列聖と真の芸術的評価を重んじる作家たちと、商業的成功を優先しがちな出版業界とのあいだには、文学賞に対するスタンスに乖離が生じてしまうのだ。

ところがプルーストに関して言えば、彼が文学賞に見出したメリットはおもに、文化的エリート層以外の読者大衆にまで自身の読者層を拡大すること以上のものではなかったようだ。とくに受賞によって文学的正統性を獲得することを、彼はあまり期待していなかったようである。事実、ゴンクール賞の権威にもそれほど関心はなかったようで、1913年のレオン・ブルム宛の書簡では、ゴンクール賞の候補リストに入ることを望みながらも、「ゴンクール賞というものがどんなものなのか、あまりよく分からない[24]」と、打ち明けている。また、ゴンクール・アカデミーの審査団に自分を推薦してもらえないかとピエールブール夫人に依頼する折にも、真の目的は、読者公衆との接触にあることを強調している。

受賞できずとも、誰かが私の受賞の弁護をしてくれ、それについて議論してもらえることがあるならば、私の本に光を照らすことになるでしょうし、読んでもらえることもあるわけでして、それこそ私が唯一望んでいることなのです。私は、読まれないのではないかと恐れなくてもすむように、真剣に細心の注意を払ってこの本を構成したのです。しかし、誰からも読まれないのではないかと恐ろしくてなりません。というのも、それがとても長大で濃密なものだからです[25]。

顧客の拡大がゴンクール賞をめぐる唯一の関心事であるにもかかわらず、あるいはそうであったからこそ、プルーストは受賞のためにできることはすべて行ったようだ。だが第1巻は受賞にはいたらず、このような人脈の活用も徒労に終わる。第2巻については、同じ失敗を繰り返さぬよう、前回以上の努力を行った。確かに最初のうちこそ、プルーストは謙虚な姿勢を崩さずにいた。ゴンクール・アカデミーのメンバーであるロズニー兄から、『失われた時を求めて』は是非とも推薦に値するという旨の手紙を受け取った際には、「いかなる外的影響にも左右されず、ただこの書物によってのみ、アカデミー・メンバーがご判断いただくこと[26]」が望ましいとの返事を出していた。しかし、勝機ありと見るや、ロベール・ド゠フレール、レイナルド・アーン、ルイ・ド゠ロベール、ロベール・ドレフュスなど、友人知己との人脈を駆使して、彼を受賞させることに反対しているレオン・エニックやリュシアン・デカーヴなどのアカデミー会員の説得に乗り出した[27]。また、ロズニー兄からの知らせにより、10人中6人の審査員がプルーストへの授与に賛意を示しているなか、審査団長がいまだ態度を保留しているとの情報を得たプルーストは、団長宛てに直接手紙をしたため支持を取りつけようとしたのである[28]。作品の価値のみによって審査されることを望むどころか、きわめて大胆なキャンペーン展開と言える。

交友関係やアカデミー会員を動員するという戦術なしには、おそらくプルーストの受賞はあり得なかったかもしれない。というのも、この時期のフランスの文壇、および読者公衆は、ルポルタージュ文学など、社会的・政治的状況にコミットする作品を好む傾向にあったからだ。1919年は、大戦終結の年でもあり、戦争についての記録文学、証言文学が大衆だけでなく文壇の注目の的となるのは必定であった。これはもちろん、プルーストにとって有利な条件ではない。事実、

彼は、ロラン・ドルジュレスの『木の十字架』という強敵に打ち勝たねばならなかったのだ。プルーストはもともと当時の文人たちが政治社会問題を扱う作品を重要視する傾向があることを知り抜いており[29]、ドルジュレスがライバルとなれば戦況は彼にとって不利であると見ていたに違いない。だからこそ、コネクションという「外的影響」の活用を敢えて行ったのであろう。それに彼自身、受賞の勝因は、『失われた時を求めて』の芸術的価値にあるというよりかはむしろ、彼が利用した人脈の動員がうまく機能したことにあると理解していたようだ。受賞後、プルーストは、ジュリア・ドーデに手紙を送り、勝因は審査員のひとりが友人であるレオン・ドーデであったことによるところが大きいと、謝意を表明している[30]。

しかし、この年のゴンクール賞がもたらした経済効果について言えば、プルーストよりも、ドルジュレスのほうがはるかに大きな恩恵を受けた。『木の十字架』がこれによって8万5千部の売り上げを記録したのに対し、『花咲く乙女たちのかげに』は4万7千部にとどまった[31]。とはいえ、第2巻発売当初のこの数字は、第1巻の3千部を比較にならないほど大幅に上回っている[32]。数字だけを見ても、ゴンクール賞授与が読者層拡大に寄与したことは明らかだ。この成功に励まされたのか、プルーストはガリマールに対し、第1巻の増刷を要請する。これもまた功を奏し、第1巻の売れ行きも改善された[33]。要するに、ドルジュレスには遠く及ばなかったとはいえ、ゴンクール賞はプルーストの認知度を大きく高めたと言ってよい。

ところが残念ながら、多くの批評家やジャーナリストは、プルーストは受賞には値しないと言って、彼を攻撃した。あるものは彼の年齢や社会的地位を根拠に受賞を不適切であるとした[34]。このような不当な誹謗中傷に対し、プルーストはわりと根気強く反論している[35]。しかし同時に、次のポール・スーデ宛書簡が示しているとおり、読者の増大という主要目的の達成は、プルーストをして、文学場における名声と評価の問題に対して超然とした態度をとらせる。

> 人は、「精神」の「社会」に仲間入りすることを望み、そのために読まれることを望むのです。そういうわけで[受賞が]私の年齢と「文壇上の地位」(？)にふさわしくないと新聞記者たちが言っても、そんな忠告にはしたがわたかったでしょう。もし賞のおかげで、読者を得るなら、それによって私

がおとしめられても構いません[36]。

受賞前よりも読者が増えたという事実だけで、プルーストが満足するには十分だったのである。すでに紹介した1913年のピエールブール夫人宛の書簡でも述べられていたように、彼が文学賞に求めたのは文学場における列聖ではなく、とにかく多くの人から読まれること、ただ一点だったのだから。読者公衆に承認されることがいかに重要であったかをさらに深く理解するため、「精神」の「社会」という表現の意味を掘り下げてみたい。上の書簡では、大文字の利用によって強調はされているものの、作家がそれによって何を意味したいのかは定かでない。これと全く同じ表現は、『花咲く乙女たちのかげに』のなかの、ベートーヴェンの後期四重奏曲について述べたくだりに見出される。

> ベートーヴェンの四重奏曲それ自体が、50年の歳月をかけてベートーヴェンの四重奏曲の聴衆を生み出し、増やしてきたのであり、それによって、芸術家たちの価値を進歩させたわけではないにせよ、少なくとも精神の社会、つまり、その作品があらわれたときには存在しなかった、その作品を愛することのできる人びとから広く構成される社会に進歩をもたらしたのである[37]。

スーデ宛の手紙で、「精神の社会に仲間入りすること」を望んでいると言ったとき、プルーストは、読者公衆の涵養と増殖につとめる希望を同時に表明していたということだ。しかし、ベートーヴェンの後期室内楽についてのこの見解は、大衆に対するあまりに楽観的な見方を含んではいないだろうか。作品を発表しさえすれば、後は聴衆が勝手に成長してゆくなどありえるはずがない。傑作が認知され評価されるためには年月を要するということを主張するために語られたこのくだりでは、楽聖の神格化されたイメージに忠実であるせいか、芸術受容の卑俗な実態については無視されている。しかしプルーストは、芸術作品の承認過程のいわば舞台裏に無頓着なわけではなかった。というのも、彼は、ヴァントゥイユの七重奏曲の初演場面のなかで、ある作品が認知されるためには、それを見出し宣伝するためのサロン、文化行政、作品を取り巻く人間関係など、作品外のさまざまな要因が複合的に機能する必要があると語っている[38]。ところで文学賞受賞は、それらの外的要因のひとつであるのみならず、精神の社会の構築を促すため

のもっとも有効な方策ではないだろうか。文学賞授与のおかげで、『失われた時を求めて』は、ベートーヴェンの後期四重奏曲やヴァントゥイユの七重奏曲のように、作者の死後数十年後にようやく光があてられるという神話的宿命をたどることはなかったのだ。プルーストも四重奏曲の作者としてのベートーヴェンと同じ轍を踏むことは望んでいなかっただろう。彼の小説は、ゴンクール賞によって、「ドルイド教の寺院」にような「誰も訪れることのない何か」ではなく、「信者らが少しずつ真実を学び取る教会[39]」たりえたのである。

3.『ウーヴル・リーブル』誌への接近―新たな読者と出会うために―

たしかにプルーストが文学賞に興味を示すだけでなく受賞を勝ち取るための自己ピーアールさえ怠らなかったのは、もっぱら、”販売促進”が目当てであった。ただ他方で、文学賞が受賞作品に正統性を付与し、いわば文学史上に名を残すべき作品として聖別する機能があることに無関心だったわけではない。そもそもゴンクール賞とは、その年で“もっとも優れた小説”に与えられる賞である。プルーストは受賞後、セレスト・アルバレに次のような感慨を述べる。「これは、今日、価値のある唯一の賞だよ。なぜかって、小説の何たるかを知り、ひとつの小説が何に値するのかを知っている人びとによって授与される賞だからだよ[40]。」プルーストはそれまで、自身の作品が本当に小説なのかどうか、小説という名称で一般的に理解されているジャンルに属するものなのかどうか、確信を持っていなかった。1908年、クロード・フェルヴァルの名で小説を発表したばかりのピエールブール夫人を祝福する際には、夫人の「存在と状況を創造する[41]」能力を羨み、そのような能力を発揮しうる作家こそ小説家であると述べる。「あなたこそ、小説家ですね。あなたこそ[42]。」1908年はプルーストの執筆がはじまる年であるが、まるで、自分自身は小説創造に必要な才能がないか、あるいは、小説創造とは無縁であるかのような言いぐさである。1909年の作家は、当時執筆中の著書が、「一個の長大な本[43]」であり、「一種の小説のような長大な作品[44]」であると述べるものの、いわゆる小説であるとは、少なくともプルーストの考える従来の小説形式に収まるものとは考えていなかったようだ。第1巻の刊行直前には、自身の著作が「伝統的な小説にはまったく似ていない[45]」ために、読者に拒絶されるのではないかという不安を吐露している。そんななかでのゴンクール賞

受賞である。それは、『失われた時を求めて』が、1913年の第1巻刊行以来はじめて、「小説作品」として分類されるべき作品であると正式に認知されたということを意味する。また、リュック・フレスの指摘するように、この快挙によってプルーストは、自分自身が正真正銘の小説家であると自覚するようになり[46]、彼の執筆活動はこれ以降、この作品のいわゆる小説的な側面の増殖と改良に集中される。『ソドムとゴモラ』、『囚われの女』の誕生は、その結果である。作家は実際、『ソドムとゴモラ』について、「心理的・小説的事象がもっとも豊富な作品[47]」であると言っている。その意味で、アントワーヌ・コンパニョンの「この巻は、プルースト作品のなかでもっともバルザック的な挿話を構成する[48]」という注釈は、プルーストの創作意図を正確に踏まえたものだと言える。

アカデミー会員によって正式に小説作品であることを承認されたからには、『失われた時を求めて』は公衆にとって近づきがたい、未知の作品などではなくなった。大多数の人びとが小説作品であると認めることのできる作品である。このような自信に突き動かされているかのごとくプルーストは、その後、「もっとも優れた小説」としての正統性は保ったまま、自身の読者層をさらに拡大すること、つまり、ラルボーの分類に戻るなら第2・第3のカテゴリーにまで顧客を拡大する可能性を探っていく。実際、晩年のプルーストの販売促進活動はさらに加速化する。具体的には、NRFグループにとどまっていては接近できないであろう読者層を引きつけるため、『NRF』誌以外の雑誌にも小説の部分的発表を持ちかける、といった戦略である。

1921年9月、プルーストは、ガストン・ガリマールに対して、『ウーヴル・リーブル』誌での『ソドムとゴモラ』の抜粋投稿を計画している旨を報告する。『ウーヴル・リーブル』誌は、1921年6月にアルテーム・ファイヤールによって創刊されたばかりの雑誌で、毎月、未刊作品を抜粋形式で、短篇・中篇の場合であればほぼ全篇を発表する雑誌であった。ガリマールは、プルーストの提案に異を唱える。理由は次のとおりである。第1に、『ウーヴル・リーブル』誌は、通俗的雑誌であり、プルーストの作品を出版するには不向きである、というもの。ガリマールによれば、この新興雑誌は、「もっとも俗悪で、低俗、『大衆』むきのものを出版している[49]」雑誌であった。また、「もしもNRFを構成する作家らが、今日はロスタン、明日はフランシス゠ド・クロワッセにならって（この雑誌に）協力するなんてことになれば、NRFの存在意義はもはやなくなるだろう[50]」

と懸念を表明する。第２の理由は、『ウーヴル・リーブル』誌は未発表小説のほとんどのページを公表している以上、多くの読者がこの雑誌を読むことだけで満足し、肝心の本を購入する動機が奪われてしまうだろう、というものであった。

> 請け負いますが、『ウーヴル・リーブル』誌にこんな形で発表することになれば、あなたが次に提供してくださる全篇が被害をうけることになるでしょう。昨日、レイナルド・アーンは今日のフランスの読者についてわれわれにこう言っていました。彼らの怠惰ぶりときたら、多くの人びとがファイヤールの冊子でもって一部分を読めばすれでよしとすることは確実でしょう[51]。

ガリマールは、この言葉が、自分が考えている以上にプルーストにとって説得的であったかもしれないということを理解していただろうか。本稿のテーマではないので詳述は避けるが、現代人の読書方法が断片的であることについてのプルーストの懸念は、『消え去ったアルベルチーヌ』の、いわゆる『ル・フィガロ』掲載の挿話のなかで表現されている[52]。また、1906年、『胡麻と百合』の翻訳についてのアンドレ・ボーニエの書評が、『ル・フィガロ』に掲載された際の実話も想起される。プルーストの友人の多くがこの新聞の購読者であるにもかかわらず、その書評を読み落としており ── その友人のひとりは皮肉なことにレイナルド・アーンである ──、プルーストは自身の文壇デビューが世間から認知されなかったことを遺憾に思い、現代の読者の注意散漫ぶりを批判していた[53]。また、自身の小説が、新聞や雑誌での連載ではなく、書籍として刊行されることへのこだわりは、プルースト自身が当初から抱いていたものだった[54]。

ガリマールがプルーストの新たな計画に反対する3つ目の理由は、主に収益に関するものであった。すなわち、『ウーヴル・リーブル』誌への投稿によって得られる利益は、NRFグループとの協働だけを今後もつづけることで得られるだろう利益と比較して、そう大差はない、という理由である。プルーストの『ウーヴル・リーブル』誌への接近の動機が、ある程度までは経済的利益を増大させることであったのは疑いようがなく、ガリマールのこの説得は無駄ではなかったはずだ。

しかし、以上のガリマールの説得はいずれも、プルーストを翻意させるのに十分ではなかった。翌日、プルーストは返信を出し、『ウーヴル・リーブル』誌へ

の投稿の必要性をあらためて説いた。彼はまず、この雑誌に掲載予定の抜粋は、『ソドムとゴモラ』から作成されており、タイトルは「嫉妬」の予定であることを報告する。さらに、NRF出版からの報酬の支払いが滞っている以上、ガリマールの経済的利益についての主張は的を射ていないと、反論する。また、NRFに留まることが作品の正統性維持に寄与しうるという最初の主張さえ論拠に欠いている、と述べる。その理由は単純で、少なくとも作家によると、「NRFは、なにも傑作だけを出版しているわけではない[55]」のだから。ガリマールの2つ目の主張には次のように反論する。『ウーヴル・リーブル』誌に抜粋を与えたからといって、NRFの収益を下げることにはならない。というのも、作成中の抜粋は「嫉妬」という題であり、NRFから出版予定の本のタイトルとは異なるゆえに、読者が両者を混同するはずはない、というのだ。ともかくプルーストは、その他の抜粋をこれ以上提供することはしない、と請け合う。

ところが、最後の約束はあっさりと破られる。1922年8月、ポール・モランの作品が、『ウーヴル・リーブル』誌に掲載されたからである。モランと言えば、「NRFグループ最大の秘蔵っ子[56]」であり、プルーストは彼のなかに、ジャン・ジロドゥに匹敵する才能を見出していた[57]。これを見たプルーストは、今度は『囚われの女』からの抜粋を件の雑誌に投稿するための許可をガリマールから得ようとする。

> モランは、「あなたがたのエース」なのですから、彼が『ウーヴル・リーブル』誌と協働したということは、あなたがこの件について考えを改められたということを期待してもよろしいですね。そしてそのことは私にとって幸いなことであると告白申し上げましょう。私の次の巻、『囚われの女』が完全に小説的な巻であるだけによりいっそう、この件についてのあなたのご判断をいただきたく、いてもたってもいられなくなるでしょう[58]。

要するに、モランに許されることは自分にも許されて当然、というわけだ。モランのような才能ある純文学作家が『ウーヴル・リーブル』誌に寄稿しても問題がないのなら、プルーストの作品がこのような大衆雑誌で発表されることは不適切であるとするガリマールの主張は通るはずがない。また、興味深いことに、『囚われの女』の「小説的な」側面を強調し、この側面が『ウーヴル・リーブル』誌

の読者層の趣味に合致しやすいことを示唆している。つまり、次巻をこの雑誌で公にすることで、第1巻や第2巻のように美学的・哲学的色彩の強い部分には親しみを感じない読者の関心を引きつけることができるかもしれないということである。小説に対してドラマチックな筋立てや作中人物の心理分析を期待する読者層を獲得するチャンスを、作家はこの雑誌との提携に見出していたのかもしれない。彼にとって重要なことは、「NRF誌とNRF出版とで（同じ読者に）2度読まれるよりかは、広範な読者公衆によって読まれること[59]」なのだから。

ガリマールはまたもやこの件について懸念を表明する[60]。第一に、未発表作品の大半を安価な雑誌に提供すれば、必ずや自社での書籍販売に支障が出る。第二に、読者層の拡大が目的であるにせよ、わざわざ『ウーヴル・リーブル』誌と提携する必要はない。ガリマール社はすでに、件の雑誌よりも知的な、約2万から成る購読者をかかえているのだから。このような反論をしているところを見ると、ガリマールが果たしてプルーストの真意を理解していたかどうか疑わしい。小説家が望んでいたのは、ガリマールの言うような教養層へのアプローチではもはやなく、伝統的な小説のほうに親しみを感じているより広範な大衆であったのだ。それに彼は、1916年の段階ですでにNRF周辺の読者層は獲得済みであると言っていたではないか。ガリマール社の顧客への売り込みはこれ以上必要ないというのが、プルーストの考えではなかったろうか。事実、彼は、『ウーヴル・リーブル』誌への投稿を急いでいた同時期に、『NRF』編集部のジャック・リヴィエールから2つの号（1922年10月と11月）への『囚われの女』の抜粋掲載を提案されたにもかかわらず、こちらにはほとんど興味を示さなくなっていた[61]。

プルーストにとって、より「小説的な」巻の出版は、バルザック的な小説しか知らない読者層にまで顧客を増やす機会だったのだ。だからこそ、新たな雑誌との提携により、書籍販売に先駆けて、自身の小説が理解不能なものではなく、完全な小説作品であることを予告する必要があったのだ。『ソドムとゴモラII』が、前のどの巻よりも売れ行きが好調であったという事実は、件の雑誌に抜粋を発表したことが功を奏した結果かもしれない[62]。

結語

以上のようにプルーストの文学戦略は、ゴンクール賞受賞を境にして、NRFグ

ループ周辺の同業者から評価されることよりも、より一般的な読者公衆のあいだで広く認知されることを優先しはじめている。それまで『失われた時を求めて』を、評論と小説のあいだにある形容不可能な作品として認識していた彼は、ゴンクール賞によって、この作品が制度としての“小説”に属することを初めて自覚する。この自覚はまた、自己の小説家としてのアイデンティティー確立を促し、続編の創作に影響を与えるばかりではなかった。彼は、読者公衆に対する自己のイメージを意識しつつ、NRFグループ周辺の同業者集団だけでなく、大衆へのアプローチを積極的に行うようになったのだ。『ウーヴル・リーブル』誌への接近はその一例であり、ゴンクール賞受賞によって促進された文学戦略の転換を意味すると言える。

註

1 Sylvie Ducas, *La littérature à quel(s) prix ? : histoire des prix littéraires*, Paris, la Découverte, 2013

2 Nathalie Heinich, L'éprouve de la grandeur. Prix littéraires et reconnaissance, Paris, la Découverte, 1999

3 Thierry Laget, *Proust, Prix Goncourt : une émeute littéraire*, Paris, Gallimard, 2019

4 後述するようにNRF誌は抜粋の掲載をも拒否している。このことからジャン＝イヴ・タディエは、作品の長さはプルーストの原稿が拒否された理由として説得的でないと指摘する。詳しくは、Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust Biographie*, Paris, Gallimard, 1996, p. 688-689. を参照のこと。

5 Marcel Proust, *Correspondance*, texte établi et annoté par Philip Kolb, Paris, Plon, 21 volumes, 1970-1993, t, XII, p. 38.（以下、*Corr* と略記したうえ、巻数と項数のみ示す。）

6 *Corr*, t. XII, p. 38.

7 *Corr*, t. XII, p.34. を見よ。

8 *Corr*, t. XII, p. 54.

9 *Corr*, t. XII, p. 157.

10 Pierre Assouline, *Gaston Gallimard : un demi-siècle d'édition française*, Paris, Balland, 1984, p. 59. を参照のこと。

11 *Corr*, t. XIII, p. 98-100. を見よ。

12 Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust Biographie*, Paris, Gallimard, 1996, p. 723.

13 *Corr*, t. XIII, p. 115.

14 *Corr*, t. XIII, p. 125-128. を見よ。

15 *Correspondance*（*1914 - 1922*）：*Marcel Proust, Jacques Rivière*, présentée et annotée par Philip Kolb,Paris, Gallimard, 1976, p. 26.

16 *Ibid*., p. 31.

17 *Ibid*., p. 37.

18 *Corr*, t. XV, p. 129-134. を見よ。

19 Sylvie Ducas, *op, cit*., p. 48. を参照のこと。

20 Pierre Assouline, *op*. *cit*., p. 107. を参照のこと。

21 Sylvie Ducas, *op*. *cit*., p. 22.

22 *Ibid*., p. 22.

23 *Ibid*., p. 23.

24 *Corr*, t. XII, p. 91.

25 *Corr*, t. XII, p. 304-305.

26 *Corr*, t. XVIII, p. 455.

27 Pierre Assouline, *op*. *cit*., p. 108. を参照のこと。

28 審査団長は、ロズニー兄からプルーストに、審査団の投票意思についての情報が漏らされたことを知らずにいた。そんななかプルーストはロズニー兄宛ての書簡のなかで次のような提案を行っている。「私は、当該のアカデミー会員に手紙を書き、その方からのご支持にあらためて謝意を表し、アカデミーの会合から、彼さえ支持しつづけてくれれば私が受賞するであろうという情報が洩れていると伝えることができます。そして、彼にそのまま翻意しないよう要請するのです。そうすれば、私にそんなことを言ったのが他の誰でもなくあなたであることを、その方が見抜くなんてことはありえないだろうと思います。」（*Corr*, t.　XVIII, p. 467.）

29 政治的・社会的問題に直接コミットする文学を奨励する傾向を、プルーストはノルポア侯爵に託し暗に批判している。詳しくは、Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, édition de Jean-Yves Tadié, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », quatre volumes, 1987-1989, t. I, p. 464-465.（以下、*RTP* と略記し、巻数と項数のみ示す）を参照のこと。

30 *Corr*, t. XVIII, p. 538-539. を見よ。

31 Sylvie Ducas, *op*. *cit*., p. 51. を参照のこと。

32 Pierre Assouline, *op*. *cit*., p. 107. を参照のこと。

33 *Correspondance (1912-1922) : Marcel Proust, Gaston Gallimard*, édition établie, présentée et annotée par Pascal Fouché, Paris, Gallimard, 1989. p. 232-234. を見よ。

34 ゴンクール・アカデミーの創設目的は、経済的に不安定な新人作家に、文壇における正統的地位を付与し、彼らがジャーナリズムの論理に身をゆだねることなく、純粋に文学創造のみに専心できるよう支援することであった。これについては、Sylvie Ducas, *op*. *cit*., p. 38-39. を参照のこと。

35 年齢や社会的地位に関する批判に対する反論については、*Corr*, t. XIX, p. 52. を参照のこと。また、それ以外にも、プルーストの作品が、当時の政治的・社会的状況、具体的には大戦後の国内外の危機的状況と無縁であることを理由に、受賞に異議を唱える批判もあった。これに対する作家の反論については、たとえば、*Corr*, t. XVIII, p. 518-519を見よ。

36 *Corr*, t. XVIII, p. 535.

37 *RTP*, t. I, p. 522.

38 *RTP*, t. III, p. 768.

39 *RTP*, t. IV, p. 618.

40 Céleste Albaret, *Monsieur Proust*, souvenirs recueillis par Georges Belmont, Paris, Robert Laffont, 1973, p. 367.

41 *Corr*, t. VIII, p. 250.

42 *Corr,* t. VIII, p. 250.

43 *Corr*, t. IX, p. 163.

44 *Corr*, t. IX, p. 221.

45 *Corr*, t. XI, p. 252.

46 Luc Fraisse, « Proust et le pacte romanesque », *Poétique*, n° 142, 2005, p. 229.

47 *Corr*, t. XX, p. 467.

48 *RTP*, t. III, p. 1185.

49 *Correspondance (1912-1922) : Marcel Proust, Gaston Gallimard, op. cit*., p. 385.

50 *Ibid*., p. 386.

51 *Ibid*., p. 385.

52 *RTP*, t. IV, p. 149. を見よ。

53 *Corr*, t. VI, p. 131-132. を見よ。

54 *Corr*, t. IX, p. 179-180, t. XI, p. 76, t. XII, p. 229. を見よ。

55 *Correspondance (1912-1922) : Marcel Proust, Gaston Gallimard, op. cit*., p. 389.

56 *Ibid*., p. 586.

57 Marcel Proust, *Essais et articles*, édition de Pierre Clarac et Yves Sandre, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 615. を参照のこと。

58 *Correspondance (1912-1922) : Marcel Proust, Gaston Gallimard, op. cit*., p. 586.

59 *Ibid*., p. 586.

60 *Ibid*., p. 590-592. を見よ。

61 プルーストはそれでもＮＲＦ誌の要請に応じ、1922年11月号には「眠る彼女をみつめること。私のめざめ」を、1923年1月号のために「トロカデロでのマチネ。ベルゴットの死」を提供する。

62 プルーストいわく「(「嫉妬」の）発表は、もっともめぐまれた影響力をもつことができました。というのも私のどの本も、ソドムＩＩほどの成功をおさめるこ

とはできなかったからです。」（*Correspondance (1912-1922) : Marcel Proust*, *Gaston Gallimard*, *op*. *cit*., p. 607.）